慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プロとアマチュア
Sub Title	
Author	岸川, 剛
Publisher	慶應医学会
Publication year	2004
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.81, No.2 (2004. 6) ,p.144- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	話題
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20040600-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

店頭に堂々と陳列されているのをみると，数円単位で厚生労働省と折衝を重ねる保健医療の現在と比較し本当に複雑な心境である．今後医療行為としての男性ホルモン補充療法が客観的に評価された結果が徐々に公表され，その効果と危険性がもっと世間において認知されるようになれば，こういった状況も次第に改善されていくものと期待したい．

男性更年期では女性更年期における骨粗鬆症のような客観的な評価が可能である病変はほとんどなく，精神心理的な評価が治療判定の大部分を占めている．したがって男性ホルモンの補充療法のみで治療が単純に終わることは通常なく，充分な精神的，肉体的カウンセリングを行う体制が本来最も重要になってくる．たしかに男性ホルモン補充が必要と考えられる症例であっても，良好な治療効果を得るためにはカウンセリングに依存する部分がかなり大きいことがわかってきているうえに，正確には把握していないが性ホルモンとは関連のない精神的ストレスが症状の主体である方々が，受診する科がないために男性更年期を扱う外来を受診しているケースは少なくないはずである．さらに精神心理的面に対しての投薬には専門家の判断も当然必要になってくることから，複数の科にまたがる医療を同時に提供できるような外来が理想である．ただこれらの患者さんに適切にかつ効率的に医療を提供していくシステムが構築されるにはもう少し時間が必要とおもわれ，しばらくの間は男性更年期様の症状を訴えて来院する患者さんには泌尿器科医が治療の窓口となり試行錯誤しながら総合的なケアを組み立てていくことになるであろう．

今のまま平和な日本が50年間続けば，ようやく中高年人口の割合は減少しゆとりの医療が将来実現されているかもしれないが，今後最低30年間は中高年男性の人口の割合は増加傾向にあることは間違いないことである．その間，日本の医療を行う医師として，また自らが中高年予備軍で医療サービスを今後享受するものとして，泌尿器科医が中高年男性のQOLの向上にお手伝いをすることができれば幸いと考えている．

矢内原　仁（埼玉医科大学泌尿器科）

プロとアマチュア

先日午後8時過ぎに長男が，「いつもなら放送されている番組が今日はない，どうしたの．」と尋ねてきた．祭日だからだろうと思ったが，一応テレビを見た．すると声の良い歌手が，スタジオにあるスクリーン上の坂本九とともに，よく知られたある歌を歌っていた．私はいつものテレビ番組とは違う，何か変だと思い確認してみたところ，昨年の紅白の再放送とわかった．ところが何かいつもの紅白とは違っていた．NHKの方針が変わったのだろうと思ったが，その後に五木寛之氏が私と全く同じ感想を述べていた．歌手は皆，少なくとも私が見始めてからは浩然として歌っていた．格調が高いのである．堕していないのである．アナウンサーも同様であった．それは，ただ緊張して原稿を読み上げると言うのではない，自身が紅白の進行に一役買っているという，今までに私が感じたことのない強烈な自負心であり，私はテレビの前で彼らの迫力に圧倒された．番組を構成する人々は，歌手，アナウンサー，裏方構成含め，皆プロである．アマチュアの私が，プロの本気で作り上げた至境に驚愕するのは考えてみれば当然であろう．

だいぶ前のことであるが，私は苦労して将棋の初段の免状をいただいた．谷川浩司氏の主催する通信教育講座で，初段申請の許可をもらったからである．昨年米長邦雄氏が紫綬褒章を受章されたため，私も二段となる栄誉を賜ることとなった．しかしアマの二段はプロ棋士の指す手の意味を突き詰めれば絶対理解できない．露骨に言えば死ぬまでできない．羽生氏は小学校の時に少なくともアマ四段の腕前で奨励会に最下級で入会しているはずである．私は誰かの説明を聞いたとしてもプロの棋譜の理解は本質的には無理である．まして谷川氏，米長氏（プロ九段）の指す手が理解できるはずがない．ただし，先手と後手がそれぞれ二手飛車先の歩を進めたら，次の一手は金を左上にあげることくらいは知っている．しかしアマ10級の人にはこれさえも少し難しいかもしれない．力の差とは人が思う以上にあるように感じる．いわゆる「実感」である．

私は医者としては産婦人科で，野澤志朗教授の御指導により細胞診指導医という資格を持っている．先日の日本産婦人科学会栃木地方部会では，自治医科大学産婦人科の鈴木光明教授（慶応義塾出身）の直属の弟子にあたる先生が子宮癌の治療に関する新鮮な発想を発表されたとき，私は驚いて確認をお願いした．座長はいつもお世話になっている大和田助教授であったが，鈴木教授に回答を求められた．鈴木教授は，「欧米は頚癌の治療を放射線治療にたよるきらいがあるため，手術についてはわれわれのやっていることが即ち回答そのものである．」と明言された．しびれるような，体がぞくぞくするようなかっこよさであった．この瞬間，国立栃木病院の院長である長谷川寿彦先生（慶應義塾出身）が感嘆の視線を鈴木教授に向けられたように感じた．その後も種々の議論は続いたが，生殖に関する議論では必ず獨協医大の稲葉教授がコメントを加え，腫瘍に関する議論では必ず自治医大の鈴木教授がコメントを加えておられた．私は稲

葉教授ご自身が広汎子宮全摘出術の大家であることも，鈴木教授門下から生殖医学に関する優秀な医師が輩出されていることももちろん知っている．プロとはなんとすばらしいことであろうか，そして専門分野で高度化すればするほど，他人の領域に対する理解も深まり，かつ慎ましくなるものなのであろうか．この会は本当に実りあるものであった．なお発表および発言の少なくとも半分は慶應義塾ゆかりの医師によるものであったのを誇りに思い，極めて痛快であった．

最近人生を心から楽しい，と感じることができるようになってきた．全部の分野においてプロになることはできない．しかしプロがやっていることをある程度まで理解することは，専門外の分野であっても可能かもしれない．福沢先生の直系である慶應義塾の塾生ならそれくらいのことは当然であろう．私は幸いにして最近それを知った．今は趣味で株式相場の変動（具体的には特定の建設銘柄）をチェックしている．しかしアマチュアが株式の売買益をコンスタントに出すことは不可能であるとの一般論に落ち着きそうである．傍目にはどんなに簡単に見えるようなことでも人生をかけているプロには，アマチュアにはわからない苦労と底知れぬ実力があるものなのかもしれない．なお益出しを考えなければ，株価の分析は十分に楽しめる．

ある程度他の分野にも興味を持って余力を有しつつ医療を行うほうが，患者にとっても幸せでないか，真の実力が発揮できるのではないか，と最近感じるようになってきている．

岸川　剛（芳賀赤十字病院産婦人科）

生殖医療と遺伝医療
－東京歯科大学市川総合病院リプロダクションセンターの診療－

はじめに：生殖補助医療技術の進歩は挙児を切望する不妊夫婦に多大なる恩恵をもたらした．しかし同時に，“次世代へ繋がる医療”という側面から，生殖医療に関わる様々な社会的，倫理的問題が提起されている．そして今，これらの諸問題，特に生命倫理に配慮した生殖医療が求められる時代になりつつある．このような時代の流れを背景として，平成14年4月，東京歯科大学市川総合病院リプロダクションセンターが開設された．

東京歯科大学市川総合病院リプロダクションセンターの基本理念：当センターの基本理念は，(1)医学的側面に加え，社会的，心理的および倫理的側面に配慮した診療を実現する，(2)“次世代に繋がる生殖医療”に必須である遺伝子診療部を設置した運営を行う，という2点である．

理念の実行：この2つの理念を実現に導くために，まずハード面として，従来の外来診療部門（産婦人科，泌尿器科外来）から切り離し，新たな空間としてリプロダクションセンターを新設した．施設内容としては，緊張を和らげる静かな落ち着いた空間を提供するために内装，照明，ソファの風合いなどに配慮するとともに，診療におけるプライバシー保護のために診察室・カウンセリングルームを個室空間とした．組織面では女性不妊担当の産婦人科，男性不妊担当の泌尿器科，遺伝子診療・新生児医療担当の小児科，によりセンターを構成した．遺伝子診療部は，遺伝カウセリングを行うとともに，現在は精子形成遺伝子の解析行っている．ソフト面では，関連職種（各専門科医師，看護師，エンブリオロジスト，不妊カウンセラー，臨床心理士など）が必要に応じてセンター内で一同に会して，御夫婦とともに医学的，社会的，倫理的，心理的側面に配慮した診療を行う体制とした．

診療の流れ：センターにおける診療は原則として夫婦単位である．来院された方は，センター内で産婦人科ないしは泌尿器科の診療を受けてもらうとともに，できるだけ早い時期に御夫婦で不妊教室（男性ないし女性不妊教室）に参加していただき，不妊の原因，治療方法，不妊治療における遺伝医学的側面（染色体異常，奇形，重篤な疾患の発生など次世代に関するリスク）について全般的知識を得る機会としている．この際，当センターの目指す生殖医療，診療の流れ，提供できる医療サービスについても同時に提示する．こどもが欲しいという切実な気持ちに加え様々な葛藤をかかえている御夫婦が生殖医療に関わるときに，一度立ち止まって生殖医療と次世代について考える時間をもつことは，その後の診療を進めるために重要なことである．遺伝医療を必要とする御夫婦，遺伝子解析を希望した御夫婦に対しては結果を説明し，結果をもとに今後の診療方針の検討を行う．この段階では関連科の医師，臨床遺伝専門医（小児科），不妊カウンセラーが，御夫婦とともにカウンセリングルームに集まり1回40分を目安に話し合う．妊娠成立後は妊娠中の健康，分娩，胎児に関する不安や心配については産科と遺伝子診療部，出生後は新生児科へという診療の流れを円滑に進める体制作りに努力している．

当センター遺伝子診療部の2年間：診療の流れ，遺伝子診療部の業務も徐々に軌道にのってきた．男性不妊教室は，質疑応答を聞く限り参加者が普段馴染みの少ない不妊の病態，治療，染色体，遺伝子などの話をかなり的確に理解していることが伺われ，診療の出発点として機能していることが感じられる．生殖医療に関する基本